

フランス語における間接目的と与格

L'objet indirect et le datif en français

敦賀陽一郎

TSURUGA Yoichiro

TUFS

y.tsuruga@tufs.ac.jp

ふらんぼー(Flambeau) vol.45 2019, p.31-50.

原稿受理 2019-11-27 ; 最終版 2020-02-19

抄録

一方向性を持つ間接目的 $\dot{a}N$ は方向性位格の典型であり, 双方向性を備えた与格もやはり方向性位格の一種である。両者は方向性位格のクラスを構成する。これら両統辞機能の特性は動詞前の接辞代名詞と動詞後に位置する前置詞 \dot{a} 付き分離代名詞の構成・分布の類似性にも見て取れる。間接目的: **On leur pense* → *On pense à eux* と与格: **On nous leur présente* → *On nous présente à eux* の分布の類似に注目すべきである。

Summary (Résumé)

L'objet indirect $\dot{a}N$, avec une direction unilatérale, est un locatif directionnel type. Le datif, muni d'une direction bilatérale, est aussi une sorte de locatif directionnel. Ils constituent ainsi la classe de locatifs directionnels. Leur identité se voit dans les fonctionnements analogues des pronoms conjoints clitiques et de ceux, disjoints et en \dot{a} , qui sont après le prédicat. Il est à remarquer l'identité entre **On leur pense* → *On pense à eux* et **On nous leur présente* → *On nous présente à eux*.

キーワード

間接目的 objet indirect, 一方向 direction unilatérale, 与格 datif, 双方向 direction bilatérale, 接辞代名詞 pronom clitique

© ふらんぼー Flambeau 44 (2018) pp.31-50.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室

183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1 Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



1. 序論

フランス語の文構成は理論体系により名称は異なるが、主要な一次機能に関しては次のように言える。つまり、述辞を中心にしてその周りに主辞項 *sujet*, 直接目的項 *objet direct*, 間接目的項 *objet indirect*, 状況項 *circonstant* が構成されている。

L. Tesnière は主辞, 直接目的, 間接目的を行為項 *actant* として状況項と区別している。A. Martinet は特有機能 *fonction spécifique* と非特有機能とを区別し, 前者はある下位クラスの述辞にのみ結合しうる統辞関係となる。

本稿では特に間接目的 *OI (objet indirect)* に注目する。直接目的 *OD (objet direct)* は基本的に名詞句・節のように前置詞・従属接続詞等の介在なしに述辞に直接係るもので, 間接目的は前置詞等を必要とする。間接目的は種々の無色¹の前置詞を取るが, 特に前置詞 *à* を取るものに注目する。これらは例えば, *Luc arrive à Paris* のような方向性位格 *locatif directionnel* や *Luc parle à Léa*, *Luc donne ce livre à Léa* のような与格 *datif* や *Luc pense à Léa* のように正に間接目的 (cf. *OD* の *penser cela* と比較) とでもすべきもの等がある。これらは全て間接目的の大きな括りに入れることが出来る。つまり, これらを組織する述辞下位クラスは限定しうるということである。これらとは別に *Luc travaille à Paris* のように非方向性位格 *locatif non-directionnel* の状況項がある。本稿で注目する間接目的項はこの状況項を除いたものである。

特に, 間接目的の中でも与格 *parler-àN* と間接目的・方向性位格 *penser-àN* のようなものとの違いはどこにあるか (以下, 第 2 節), 間接目的や与格のそれぞれの間の, そしてお互いの間の両立可能性 (第 3 節), *faire* 使役構文の中での間接目的と与格 (第 4 節) について見て行く。次に, 与格動詞からの *àN* の独立性, 間接目的動詞の「*V-à*」の一体性 (第 5 節) を見る。最後に 2 項, 3 項構文 (*N-V-àN*, *N-V-N-àN*) の与格, 間接目的動詞で与格接辞代名詞 *lui* は許容するが間接目的接辞代名詞 *y* は許容しない (*lui/*y*) ような動詞はありうるか, もしあるとすればどのようなものを概観 (第 6 節) してみようと思う。

2. 間接目的 *àN_{OI}* と与格 *àN_{DAT}*: 接辞代名詞 (*pronom clitique*) *y* と *lui*

間接目的 *àN_{OI}* と与格 *àN_{DAT}* の明確な違いは接辞代名詞 *y* と *lui* として出て来る。以下に見るように (3) の与格は *lui* により, それ以外は, (4) の状況項も含めて, *y* により置き換えられる。

- (1) *Luc pense à ce garçon* → *Luc pense à lui* → *Luc y pense, à ce garçon* (cf. SEELBACH (1990), 142²)
- (2) *Luc arrive à Paris* → *Luc y arrive.*
- (3-1) *Luc parle à Léa* → *Luc lui parle.*
- (3-2) *Luc donne ce livre à Léa* → *Luc lui donne ce livre.*

¹ 抽象的で高頻度の *de*, *à*, *en* 等の前置詞。Cf. SPANG-HANSEN (1963), GOUGENHEIM (1959).

² 以下の用例は出典を明記する。それ以外はフランス語母語話者により確認したものである。

(4) Luc travaille à Paris → Luc y travaille.

方向性の認められる (1)~(3-2) の違いについては、これまでも色々と指摘されている。(3-2) の 3 項構文 (N_0 -V- N_1 - $\dot{a}N_2$) も含めて、与格の $\dot{a}N_2$ については次のような指摘が見られる(以下、共通性を考慮して 2 項構文でも N_0 -V- $\dot{a}N_2$ とする)。

BARNSES (1979), GREVISSE et GOOSSE (2011, 15^e éd.) : $N_{2.DAT}$ -avoir- N_1 による言い換え。

HERSLUND (1988) : $N_{2.DAT}$ -avoir- N_1 と N_1 -être- $\dot{a}N_{2.LOC}$ による言い換え。

林 (1993) : A. 受影性大, 主題性大, 前景, 具体的動き。

I(具体的変化): $lui = \dot{a}N$.

G. 受影性小, 主題性大, 後景, 具体的動き。

I(具体的変化): $y = [\dot{a}/dans/sur...]N$.

西村 (1997) : $N_{2.DAT}$ は N_0 や N_1 と同等以上の自立性あり。

N_{0I} は N_0 や N_1 に対して自立性ゼロ。

尾形 (2005) : 主体的受け手 N_{DAT} と「こと」 N_{OI} (不定詞, 作為名詞)。

敦賀 (2010) : 双方向性 *direction bilatérale* ($N_0 (\rightleftharpoons N_1) \rightleftharpoons \dot{a}N_{2.DAT}$)。

一方向性 *direction unilatérale* ($N_0 (\rightarrow N_1) \rightarrow \dot{a}N_{2.OI}$)。

Barnes の指摘(与格文の場合は $N_{2.DAT}$ を主辞とする avoir による言い換えに近い)は他にも色々見られる。

Herslund では与格でない場合は N_1 を主辞とする être の言い換えが加わる。

林の場合は 5 つの基準を導入し一方の端 A. に与格があり他方の端 G. には状況項がある。この中で受影性, 主題性(談話 *discours* の話題 *topique* ではなくて文の主題 *thème*)、前景は大体 Barnes の avoir の言い換えに関係していると言える。

西村の自立性, 尾形の主体性(*donner* 構文の分析), 敦賀の双方向性はやはりほぼ Barnes の書き換えに相応する。

敦賀の双方向性は N_0 からの働きかけに対して主体性のある $N_{2.DAT}$ からの反応がありうるということである。この N にはヒトでもモノでも種々可能であろう(« *hum: humain* 「ヒト」 » を « *lieu* » や « *matière* » とみなすことはあるし, その逆もありうる)が不定詞 V_{inf} や *que*V 節(*que* 付き名詞節, V は動詞)は不可であろう(cf. BLANCHE-BENVENISTE (1975), 164-165 の « *pers: personnel* 「人格」 »)。間接目的の $N_{2.OI}$ の意味内容は典型的に無制限で多くの場合不定詞や *que* 節に代わりうる。

以上の与格 *lui*, 特に間接目的 y の特徴については色々基準が出ているが総じて意味要因的であることは否定できない。Avoir や être による言い換えも結局は意味的 *paraphrase* である限り当然である(cf. HERSLUND (1988), 198)。動詞と密接に結びついた与格 *lui* と間接目的 y であるので動詞の意味が強く関係してきて境界の明瞭でない場合も出て来るのは当然である(cf. DUNBAR (1981), 73, 結論)。

根本は動詞の項組織の基にある関係の意味でありながら, そして, 与格 *lui* と間接目的 y は極めて類似しているのではあるが, 両者にはかなり厳格な形式上の区別(*lui*, y の形態だけでなく)があるのではなかろうか。この点を以下で見て行く。

3. OI と DAT との両立性 *compatibilité*

3. 1. 同一統辞機能の両立

ある統辞関係が単文を構成している場合、同種の関係は等位 *coordination* か並列 *juxtaposition* でなければ同一文中での出現は原則として不可能である。これが文構成の中心である中核項であれば尚更である。しかし、項の指示範囲に広がりを含む関係がある場合はどうであろうか。

(5) On parle à Luc et à Léa

→ On leur parle.

(6) On parle à Luc, à Léa

→ *On lui parle à Léa.

(7) *À Luc on parle à Léa.

(8) *On pense à Luc et à Léa³.

(9) On pense à Luc et Léa (Cf. (5), (8), (9) は Melis (1996), 67-69.)

→ On pense à eux

→ On y pense

→ *On y pense à Léa (y = à Luc)

→ *A Luc on pense à Léa.

(10) On arrive au 5, rue d'Ulm à Paris.

→ *On y arrive à Paris.

→ *On y arrive au 5, rue d'Ulm.

(11) On envoie un paquet au 5, rue d'Ulm à Paris.

→ *On y envoie un paquet à Paris.

→ *On y envoie un paquet au 5, rue d'Ulm.

(6) では与格の à Luc, à Léa が動詞の右で並列に置かれている。これを動詞の前後で lui と à Léa として両立はできない。(7) のように文頭と動詞の後とでの両立も不可である。(8), (9) で分かるように動詞と前置詞 à との一体感が更に強く見える間接目的 ((5), (8), (9) を比較) の à Luc, à Léa についても等位、並列なしの両立は許容されない。

(10), (11) は方向性位格の両立の例である。これらは位格が包含関係のある空間を示す例で並列の例ではない(例えば, (10) で典型的並列にするならば On arrive à Londres, à Paris であろう)。ここでは両立は除外されていないようである。このようなこととも関連して方向性位格を状況項の一種とみなす解釈があるが、方向性の有無は間接目的の認定基準として重要であるとするのが本稿の分析である。

3. 2. 異機能(与格と間接目的)間の両立

(12) On envoie un paquet à Luc à Paris

³ Melis の指摘に反して parler à Luc et (à) Léa, penser à Luc et (à) Léa のように等位では前置詞の à の繰り返しまたは省略の可能性が両動詞の実例に見られる。

- On lui envoie un paquet à Paris
- On y envoie un paquet à Luc
- ?On lui y envoie un paquet. (y=à Paris; 文脈により了解)

上例では統辞関係の違いが更に両立を容易にしていると言えないだろうか。しかし, à Luc と à Paris の両立は (10) の au 5, rue d'Ulm と à Paris の両立にかなり似ているように見える。À Luc と à Paris の両立は動詞前の lui と y⁴としては難しいようである(cf. 3.4. [lqii] の音声衝突)。しかし, このことは逆にそれぞれ方向性を持っている与格と間接目的との間の類似性を示しているとも言える。つまり, 類似性が強いために, 関係上の拘束が強くなる動詞前の接辞位置において両立が難しくなるということである。動詞前の間接目的の両立に関しては他の種々の問題点もある。これは次の 3.3. 以下でより詳しく見る。

3. 3. 動詞前の接辞代名詞の両立

- (13) On me le présente.
- (14) On la lui présente.
- (15) *On me lui présente
→ On me présente à lui.
- (16) On l'envoie à Paris
→ On l'y envoie.
- (17) On m'envoie à Paris
→ On m'y envoie.

動詞前の接辞代名詞の両立についてはかなり強い制約が知られている。

S	-	OD/DAT	-	OD	-	DAT	-	OI	-	(OI)	-	V.
On		me		le		lui		y		(en)		présente.
		te		la		leur						
		nous		les								
		vous										
		se										

上で基本的に可能な両立は項の配列順も含めて, 現在の問題点関連では以下のとおりである。(以下では適宜直接目的 OD を [] に, 与格・間接目的 DAT・OI を < > に入れて明示する。)

<me/te/nous/vous/se>_{DAT}-[le/la/les]_{OD}-V
 [le/la/les]_{OD}-<lui/leur>_{DAT}-V
 [me/te/nous/vous/se]_{OD}-<y>_{OI}-V
 [le/la/les]_{OD}-<y>_{OI}-V

⁴ On leur y envoie un paquet, à Paris ならより良くて, On nous y envoie un paquet, à Paris なら更に良いとする母語話者もいる。

基本的に *[me/te/nous/vous]_{OD}-<lui/leur>_{DAT}-V, *<lui/leur>_{DAT}-<y>_{OI}-V は不可である。この点は次の 3.3. でも扱うが、ここでは、特に、「3 人称 OD—3 人称 DAT」が可能なのに「1, 2 人称・再帰 OD—3 人称 DAT」が不可なのは何故かという点を見る。事実関係ははっきりしているのにその理由の説明がされていないということである。Postal も次のように言っている（下線, [], < > は筆者）。

« (35) h. *Philippe [se/me/te/nous/vous] <lui> présente

i. Philippe [se/me/te/nous/vous] présente <à lui>. » (POSTAL (1990), 119)

« [...] the characterizations [...] are well known, no adequate account of them exists. [...] paradigm (35) and that in (37), whose pattern resembles that of (35h, i)

(37) b. Philippe pense <à elle>.

c. *Phillippe <lui> pense. » (*Idem.*, 120)

「1, 2 人称・再帰 OD—3 人称 DAT」の許容不可には人称、統辞機能の文構成上の主題 *thème* の階層と項の基本配列順が関係している (cf. TSURUGA (1992))。

人称の主題性 : 1 人称 > 2 人称 > 3 人称
je tu il

統辞機能の主題性 : $S \geq DAT > OD$ または $DAT \geq S > OD$
($S \geq DAT$: S は DAT 以上, $DAT > OD$: DAT は OD より上)
On le lui présente, On lui obéit.
 $S > OD > OI$
Luc pense à Léa, Luc envoie ce livre à Paris.

項の基本配列順 : S-(V)-OD-DAT/OI
Luc présente Léa à Jean.
Luc envoie Léa à Paris.

上の基本原則によって<me>-[le], *[me]-<lui>, *[te]-<nous>での高低を見てみよう。

主題性「高・高—低・低」 : 高・高が先行, 低・低が後行で両立可.
<me> -[le] : <me>-[le]-V. (On me le présente.)

1^{ère} pers. : 高 3^e pers : 低
DAT : 高 OD : 低

「高⇔低—低⇔高」 : 高・低対立が連続で両立不可.
*[me] -<lui> → [me]-V-<à lui>. (On me présente à lui.)

1^{ère} pers. : 高 3^e pers : 低
OD : 低 DAT : 高

「高⇔低—高・高」 : 高・低対立が先行, 高・高が後行で両立不可.

*[te] -<nous> → [te]-V-<à nous>. (?On te présente à nous⁵.)
 2^e pers. : 高 2^e pers : 高
 OD : 低 DAT : 高

先ず, [le]<lui> は同一人称で, この場合 OD-DAT の基本配列順が守られることに注目しよう (1, 2 人称間においては他の要因も加わる)。<me>-[le] は異人称で他要因も介入して DAT-OD の順となっている。

次に, 上の *[te]-<nous>-V を考慮すると, 「1, 2 人称・再帰 OD－3 人称 DAT」は不可」は「1, 2 人称・再帰 OD－1, 2, 3 人称・再帰 DAT」は不可」の方がより厳密になる。つまり, 「1, 2 人称・再帰 OD」の接辞代名詞とは全接辞代名詞の DAT が両立不可になる。この種の代名詞 OD について Postal は « a fancy 2 is crucial » (「2」は OD) (POSTAL (1990), 123) と言っている。つまり, 「1, 2 人称 OD」自体 (再帰は主辞と同一指示で 1, 2 人称に準ずる) において人称と機能の主題性が対立して問題となっている訳である。

3. 4. 動詞前の類似接辞代名詞の両立

3.2. の (12) で lui-y が嫌われるのは [i-i] の音の対立とも考えられるが, 次の (18) の leur-y でも問題がある。しかし, (19) の<nous>-y, à Paris はどうだろう。Nous は DAT で問題がありうる。(20) のように nous が OD ならば問題は解消しうる。*[nous]-leur は不可なので [nous]-V-à eux となる。更に, *nous-leur の leur の代わりに y として, [nous]-y-V, <à eux/à ces gens> も可である (cf. POSTAL (1990), 127-128)。

(18) On leur envoie ce paquet à Paris

→ ?On <leur><y> envoie ce paquet, à Paris.

(19) On <nous> envoie ce paquet à Paris⁶ (下線部は同一指示)

→ On <nous>[l'] envoie à Paris

→ ?On <nous><y> envoie ce paquet, à Paris.

(20) ?On [nous] envoie <à ces personnalités><à Paris>⁷ (下線部同一指示)

→ ?On [nous]<leur> envoie à Paris

→ *On [nous] envoie <à elles><à Paris>

→ On [nous] envoie <à elles>

→ *On [nous]<y> envoie à Paris, à elles

→ On [nous]<y> envoie. (y=à ces personnalités; 文脈により了解)

動詞の右での類似機能の両立は問題がない (à ces gens-à Paris)。類似ではあるが与格と方向性位格である。動詞左の接辞代名詞の位置では <leur><y> は難しいが<nous><y> はどうであろう。むしろ, 異機能である [nous]<leur>-V は不可で [nous]-<y>-V, à eux に

⁵ Il faut que quelqu'un te présente à nous officiellement ならより良い。

⁶ RAPPAPORT HOVAV and LEVIN (2008), 136 の英語の例 « [...] her father sent her a telegram to America [...] » と比較。

⁷ (20) の諸例の許容性の判断は複雑である。母語話者により違いがありうる。

代わる。この y は与格 leur 相当であるが、方向性位格 à Paris にも相当する点に注目すべきである ([nous]<y> envoie, à eux は可だが, [nous]<y> envoie à Paris, à eux のように位格 à Paris があると y と à eux の同一指示は無理か)。動詞の右では勿論のこと左においても類似機能がかかなり両立しうるということである。動詞左では、更に、与格と方向性位格が y により表示されえてかなり近いとさえ言える。

同一統辞機能が等位・並列関係なしに複数両立するのは難しい。これは述辞に異なる中核機能項が係って構文型が構成されていることを考えれば当然である。しかし、中核項機能の区別、中核項と状況項の区別、接辞代名詞間の区別、それぞれ単純には決まりえないものであることは十分に考慮すべきである。この問題はさらに次の 4. でも追及する。

4. Faire 使役構文での与格と間接目的

OI を含む 2 項文が使役に組み込まれると、その主辞は OD になり ($N_0-V-\dot{a}N_2 + N-faire \rightarrow N-le_0-faire-V_{inf}-\dot{a}N_2$), OD を含む 2 項文の主辞は与格になる ($N_0-V-N_1 + N-faire \rightarrow N-lui_0-faire-V_{inf}-N_1$)。これにより使役文の中心である *faire-V_{inf}* の周りに異なる統辞機能が両立することになる。これが基本であるが、これから外れる例もありうる。

« Le hasard [le] fit rencontrer [deux jeunes sourdes-muettes]. (...)

Je <lui> ai fait écrire une lettre <à ses parents>.

La montre en or de sa mère ... <lui> fait penser <au calendrier>. » (TAYALATI et VAN PETEGHEM (2009), 102)

直接目的 *le* が与格 *lui* になる (*lui*→*le*) 場合は指示対象が強制されて制御力を持たない感じで、与格はある種の制御力を持つと感じられるとする(cf. 上掲論文)。これは 2.1. で話題になった与格の自立・自主と OD の自立・自主の欠如とを反映していると言える。上の 3 例目は与格 *lui* と間接目的 *au calendrier* の両立であるが類似項である。どの例においても同じ接辞代名詞が両立するのは難しい (**le-le-V*, **lui-lui-V*, **lui-y-V*)。

動詞の左右での与格、間接目的の配置・両立は単文中でも細部では複雑であるが、これが *faire* の使役構文中では別の要素も加わる。*Faire* は助動詞的に働き *faire-V_{inf}* で一体を成すので単文と複文の両者の要素が介入してくる。*Comrie* は同一統辞機能の両立(doubling と呼ぶ)を通言語的に概観している論文で次例を挙げている。(以下では一体化を で示す。)

(21) J'ai fait donner <à Claude> [une pomme] <au professeur> (COMRIE (1976), 277)

→ Je <lui> ai fait donner une pomme <au professeur>

→ Je <lui> ai fait donner une pomme <*à/par Claude>

→ *Je <lui><lui> ai fait donner une pomme.

使役構文を通常の複文とみなせば、従属節相当の元の単文 Claude donne une pomme au

professeur から見ても au professeur は donne に係ることになる。そして、使役により Claude は à lui になったのであるから、à lui は ai fait に係る (Je <lui> ai fait donner une pomme <au professeur>) ことになる。つまり、両与格の述辞核は異なる(主節の faire と従属節の donner) ので両与格は同一述辞の周りで両立している訳ではないことになる。

しかし、問題は faire 構文の特殊性が faire-V_{inf} で一体を成していて通常の複文ではないことにある。(21) では一体化した述辞核 ai fait donner に à Claude, une pomme, au professeur のそれぞれが係るとするのが自然な観方であろう。ところが、両与格を接辞代名詞化すると *Je lui lui ai fait donner une pomme で非文となる。つまり、統辞関係の中核項の集約ともいえる動詞左位置での両立は不可ということになる。

(21) について、坂原 (1997) は従属節主辞の Claude は主節の間接目的になり、従属節間接目的の au professeur は主節では間接目的の役割を停止する、つまり「chômeur (失業者, 機能喪失項) になるとしている⁸。確かに、統辞関係の両立がより限定されて出て来る接辞代名詞の両立を見ると ... *lui lui ai fait donner ... となる。

接辞代名詞化に注目すると上のようになりそうであるが、関係文法の Postal は (1990), 110 で基本文法関係として 1. Subject, 2. Direct Object, 3. Indirect Object, 4. Subobject, 5. Semiobject, 6. Quasiobject, 8. Chômeur を挙げている。上の au professeur は 5 の Semiobject 半目的項と比較できるのではなかろうか (cf. On [nous] envoie <à ces gens> → *On [nous] <leur> envoie → On [nous] envoie <à eux> において à eux は半目的項)。

代名詞化について Postal は完全に許容不可ではない Morin の次例を引用している。

« [...] Le directeur <nous><leur> a fait envoyer des paquets⁹. » (MORIN (1977), (1978). POATAL (1990), 176)

これは Le directeur a fait と Nous envoyons des paquets à ces gens を合わせた文である。この例が許容されるような範囲では上の (21) でいう従属節の与格も主節に対しての関係を失っていないことになる。

元が 2 項構文と 3 項構文であるものを使役化した場合の接辞代名詞の両立性を簡単な例で見直してみよう。(Cf. (23)~(25) の許容性は母語話者により異なりうる。)

(22) On fait + Luc répond à ces gens
→ On fait répondre [Luc]<à ces gens>

⁸ « [...] after Clause Union, the logical subject of the subordinate clause has become the indirect object of the main clause, while the indirect object of the subordinate clause has ceased to be an indirect object in the main clause. In other words, the indirect object of the subordinate clause bears the chômeur relation to the main clause. » (坂原 (1997), 130)

⁹ さらに細部の区別になるが、Postal は、この例を許容する者も次の様に許容性を区別することを指摘している。*Lucille [nous]<leur> a fait présenter par Jacques → Lucille [nous] a fait présenter <à eux> par Jacques (35Demotion 降格; 3 は IO, 5 は Semiobject 半目的項), Lucille <nous><leur> a fait présenter Jacques → *Lucille <nous> a fait présenter Jacques <à eux>. (POSTAL (1990), 176.) 動詞前の [nous]<leur>, <nous><leur> の両立における同一形態・異機能の nous に注意。

→ On [le] fait répondre <à ces gens>

→ On [le]<leur> fait répondre.

(23) On fait + Nous répondons à ces gens

→ On [nous] fait répondre <à ces gens>

→ ?On [nous]<leur> fait répondre (下線部同一指示)

→ *On [nous] fait répondre <à eux>

→ On [nous] <y> fait répondre, à eux.

(24) On fait + Luc envoie ce paquet à ces gens

→ *On fait envoyer <à Luc> ce paquet <à ces gens>

→ On fait envoyer ce paquet <à ces gens> <*à/?par Luc>

→ *On <lui><leur> fait envoyer ce paquet

(25) On fait+ Nous envoyons ce paquet à ces gens

→ *On fait envoyer <à nous(-mêmes)> ce paquet <à ces gens>

→ On <nous> fait envoyer ce paquet <à ces gens>

→ On <nous><leur> fait envoyer ce paquet (下線部同一指示)

→ *On <nous><y> fait envoyer ce paquet, <à eux>.

(21) の lui-lui に相当するのが (24) の lui leur, (25) の nous leur であって、これらはインフォーマントにもよるが、全く許容不可という訳ではないようである。

問題のある例の許容性については nous の形の曖昧さ(直接目的または間接目的・与格)もからんでいる可能性があるろう。しかし、同一機能の両立性、さらには類似機能の両立性を単純に不可とはしない方が実際の構文可能性に近いのではなかろうか。これは正に、faire 使役文の従属節が S-V-queV のような通常の複文ではないことと関係している。

5. 与格動詞の aN の独立性と間接目的動詞の「V-a」の一体化の可能性

これまで与格と間接目的・方向性位格の両立を通して両者の類似と相違を見てきた。後者が前者にとって代わる場合もあった。与格(心性的与格 *datif éthique* 等は除く)を語彙的に要求する動詞において与格の範列 *paradigme* に方向性位格が見られる例は多い。3 項構文与格の典型動詞とも言える *donner* でも *On y donne un coup de pied, au bout de la boîte* は可能だし、*préférer* は y を許容し難い (cf. 林 (1993), 107) とされることもあるが、*Tu m'y préfères, à tous tes amis* は可である (cf. POSTAL (1990), 128, EYNDE et MERTENS (2010))。2 項動詞でも *On y obéit, à la loi* や *On y répond, à cette lettre* は通常の例である。*On pourrait y parler, au mur* でさえ限界的な例としては不可ではないだろう。

Il faut lui dire adieu, au départ 等に見られるように *aN_{-hum}* (*hum* : *humain* 「ヒト」) で与格 *lui* が可能な例も多い。しかし、それは元々動詞が与格動詞であるか *lui* と方向性位格 *y* の両方を許容する動詞の場合であろう。つまり、与格が方向性位格になったり、その逆の場合は何れも動詞が許容するのが条件である。これらの場合、*aN* の *N* の意味要素が *lui* と *y* の選択に介入してくる。つまり、ヒト化・有生化、非ヒト化・無生化は文脈により可能で *aN* の非関係の意味も重要になる。*aN* はこのように動詞から幾分独立していると言える。これらには本

来的な間接目的・方向性位格を要求する *penser-àN* のようなものは含まれない。*Penser* は文脈の如何に拘わらず常に与格 *lui* を拒否する。つまり、*<lui/y>-V* と *<*lui/y>-V* との違いであるが、この違いは何処から来るのであろうか。

Penser, réfléchir, renoncer 等のように、動詞が本来の一方向性 *direction unilatérale* 「→」のみを含み前置詞 *à* と一体化しているからではないか。この場合 ($\boxed{V-d}[N]_{OI}$: $\boxed{penser-d}[N]$), 到達点からの反応を無視する一方的なものになる。この典型は直接目的の場合である (*V-N: penser-[N]_{OD}*)。 *Penser-àN* の場合, *N* に意味要因的制限はない。この *N* は全命題が可である不定詞や *queV* 節にまで通ずる。このような *àN* は *lui* を拒否し、文法的限界例も不可とする。例えば、*On pourrait <y> parler, au mur* や *On pourrait <y> penser, à ces gens* は可だが、*On pourrait <*leur> penser, à ces gens* は不可である。

Penser は本来的に厳格な一方向性位格のみを含むが、そうではない方向性位格動詞もある。その場合は帰りの方向 ← が加わり (cf. 西村(1997)), *bilatéral* ⇄ になりうる。*Arriver* : *On_{pers} arrive à Paris_{-pers.LOC.DIREC}* - *On y arrive*, *Cela_{-pers} arrive à Paris_{-pers.OI}* - *Cela y_{-pers.OI} arrive*, *Cela_{-pers} arrive à Luc_{pers.DAT}* - *Cela lui_{pers.DAT} arrive*. *Envoyer* : *On y envoie un paquet, à Paris* - *On lui envoie un paquet, à Luc*.

本来、言語表現の基本の一つには空間認識があると考えられる。空間は視覚との関係で明瞭な認識となる点で重要である。その中核に相当するのが行為項であり周辺相当は状況項であると言える。前置詞 *à* がらみのものに限定すると、行為項の方向性位格と状況項の非方向性位格とがある。方向性位格は間接目的(「何に」)に非方向性位格は状況項(「何処で」)に主に相当すると言えよう¹⁰。

方向性位格はさらに一方向性位格と双方向性位格とが考えられ、後者が与格に相当する。全ての間接目的・方向性位格項 *àN_{OI·LOC.DIREC}* の一部を与格項 *àN_{DAT}* は構成する。結局、与格は一方向の方向性位格に帰りの方向を加えた双方向になっている。つまり、方向性位格の大きなクラスの一部をなしている。すると、与格はより広い範囲を覆う方向性位格で表しうるが、狭い与格は広い方向性位格の全ての代わりにはなりえないことになるのではなかろうか。これは予想であるが、ここ迄の節においてもこの関係を反映する事実は少なからずあった。

例えば、2 項の与格動詞が使役になると *Nous leur répondons + On fait → On [nous] fait répondre <à ces gens> → ?On [nous]<leur> fait répondre → *On [nous] fait répondre <à eux> → On [nous] <y> fait répondre, à eux* となる。これは、2 項与格動詞では 1, 2 人称が主辞になりえれば与格を *y* に代えうることを示唆しているようである。

3 項与格動詞の場合 *On [nous] envoie à ces personnalités → *On [nous]<leur> envoie → On [nous] envoie <à eux> → On [nous]<y> envoie (y=à ces personnalités; 文脈で了解)* となる。これは 1, 2 人称が OD になれば与格を *y* に代えうることを示唆している¹¹。た

¹⁰ ここではこれ以上言及出来ないが、全体は直接目的項のようなものも含めると、次のような例に関係する。*Envoyer Luc à Paris, penser à Luc, parler à Luc, arriver à Luc, arriver à Paris, rester un étudiant, rester heureux, rester à la mode, rester à Paris, être à Paris, travailler à Paris*.

¹¹ ただし、*On nous présente à eux → *On nous y présente (y=à eux)* とする許容性判断もある。動詞

だ、2 項動詞の場合と違って、1, 2 人称を直接目的とすることが難しい(少なくとも、主辞にするよりは難しい)3 項動詞が少なくない可能性はありうる。直接目的は名詞・名詞句が典型で、限界的な例をも考慮すれば、文法関係としては意味制限はないとも言えるが、例えば、dire-N-àN で OD に me, te, nous, vous を入れるのは難しい。

しかし、1, 2 人称の OD 化に拘らなくとも、限界的用例(y parler, au mur 等)により 3 項与格動詞の与格を y に代えれば、lui の y による代替は検証可になるだろう。例えば、Ne déclare pas ta passion à cette femme, comme si tu l'y déclarais, au mur.

Lui → y の可能性に対して y → lui については文脈調整により方向性位格 y に「+pers」を与えて lui にすること、つまり、人格化が可能である場合と人格化によっても y が lui にならない場合とがある。この問題のよりよい理解のために、以下では、通常用法で「V(-N)-àN → <lui/*y>-V(-N)」とされる動詞の全体を動詞構文一覧等を通して概観することにする。

6. <lui/*y>-V, <lui/*y>-V-[N] の概観

以下では、<lui/*y>-V について、M. Gross の LADL-Marne-La Vallée の動詞構文一覧(下の 1, 2, 3)の中の幾つかを検討する。また、4. の具体例一覧、5. の Dubois の分類(意味要因をより考慮)、6. の Eynde の構文分類(代名詞用法により焦点)も参考にする。

1. GROSS (1974). *Méthodes en syntaxe*, Paris, Hermann.
2. BOONS, GUILLET et LECLÈRE (1976). *La Structure des phrases simples en français, Constructions intransitives*, Genève, Droz.
3. GUILLET & LECLÈRE (1992). *La Structure des phrases simples en français, Constructions transitives locatives*, Genève, Droz.
4. COURTOIS (prés.) (1997). *Index du DELAS. v08 et du Lexique-Grammaire des verbes*, Paris, Université Paris 7-CNRS UFR d'informatique LADL; (2011). *Gross-Marne-La Vallée.index-entries.csv*.
5. DUBOIS & DUBOIS-CHARLIER (1997). *Les Verbes français*, Paris, Larousse.
6. EYNDE & MERTENS (2010). *Dicovalence, v2.0*, Leuven, University of Leuven.

不定詞, queV 節を取る動詞の諸構文一覧は 1. の巻末表に出ている。これ以外の自動詞(間接目的のみのものも含む)構文は 2. に、与格・位格他動詞(V-OD-DAT/OI)構文は 3. に示されている。

これらに提示された動詞構文はかなり網羅的であるが、色々問題点もある。例えば、ある動詞の見出しでその構文の可能性を網羅的に考えるとしても、その際、作成者はその見出しの構文構成の核となる関係的記号内容 (signifié relationnel) を想定して実施する。しかし、例えば、OD の N を色々変えると動詞の意味も変わる。この変化が同一動詞の範囲内にあるか否かの判断はかなり微妙になってくる。つまり、多義性、同音異義性が関係して、1 動詞か 2 動詞かが問題になる(例えば、

により、母語話者により許容可能性が異なりうる。

上の 4 では donner は 16 種, 5 では 30 種ある)。この困難さは辞書編纂時のものであるが, 構文型に集中すると問題はより複雑になる。こういう点を踏まえて以下では概観する。上記の 1, 2, 3 の一覧で見るのは以下の下位クラスの動詞構文の中で <lui/*y> が N₀-V-àN₂, N₀-V-N₁-àN₂ に関係するものに限定した (表記は本稿のものに合わせている)。

1. GROSS (1974).

Table 7 : N₀-V-à *ce que*V₂ : 2/163 verbes

Table 9 : N₀-V-*que*V₁-àN₂ : 341/352 verbes

Table 14 : N₀-V-à *ce que*V₂-PrépN : 1/ 17 verbes

Table 15 : N₀-V-*de ce que*V-àN₂ : 11/ 13 verbes

2. BOONS *et al.* (1976). (N₂ ≠ [V_{inf}/*que*V])

Table 33 : N₀-V-àN₂ : 7/ 36 verbes

Table 35L : N₀-V-àN_{2,LOC} : 2/ 7 verbes

3. GUILLET & LECLÈRE (1992). ([N₁/N₂] ≠ [V_{inf}/*que*V])

Table 36DT : N_{0,hum}-V-N₁-àN_{2,hum} : 42/198 verbes

6. 1. GROSS (1974)

6.1.1. Table 7 : N₀-V-à *ce que*V₂ : 2/163 verbes

Mentir, obéir. (以下の 6.2.1. も参照)

この構文の典型は *penser-à*N₂ のような本来的な間接目的を取る動詞である。これは多くが àV_{inf,2}, à *ce que*V₂ を取るので, lui/*y の動詞は少ない。À *ce que*V₂ を *paradigme* 内の àN₂ に置き換えて lui/*y となる動詞は mentir と obéir の二つである。大半は *lui/y となる。この 2 動詞についても y の許容が不可という訳ではない。On obéit à cette loi → On y obéit は可であろう。Mentir は通常 àN₂ が àN_{2,pers} で On y ment は奇妙である。使役構文中ではどうだろうか。On fait + Nous mentons à ces gens → On nous fait mentir à ces gens → ??On [nous]<leur> fait mentir → *On nous fait mentir à eux → *On nous <y> fait mentir, à eux¹²。使役ではなくとも Ne me mens pas comme tu mens à n'importe qui et à n'importe quoi で à n'importe quoi は lui には代わりにくい。Ne me mens pas comme si tu y mentais, au mur は限界的な例としては可である。Mentir の間接目的は y を構文の可能性としては排除していない。

6.1.2. Table 9 : N₀-V-*que*V-àN₂ : 341/352 verbes

Affirmer, ajouter, annoncer, apprendre, arracher, assurer, avouer, cacher, citer, commander, commenter, communiquer, confesser, confier, confirmer, conseiller, crier, déclarer, décrire, défendre, demander, dire, disputer, donner, écrire, émettre,

¹² これらの許容性判断は *mentir à eux や *y mentir が元にある。本来は不可の[nous]<leur> が *y fait mentir, à eux より許容可とされている。母語話者により許容可能性は異なりうる。

énoncer, enseigner, envoyer, établir, expliquer, faire, imposer, indiquer, jeter, lire, manifester, montrer, nier, offrir, pardonner, passer, permettre, promettre, proposer, raconter, rappeler, recommander, refuser, répondre, représenter, reprocher, révéler, sortir, souhaiter, soumettre, suggérer, téléphoner, transmettre, zézayer, etc.

これは典型的伝達 *communication* 動詞の構文である。主辞項の相手となる与格項は典型的には「人格」なので、大半が *lui/*y* となる。これらの動詞でも限界的な例では *y* は不可ではないだろう。*N₀* も *àN₂* も「人格」の名詞が典型なので OD の *queV* の *paradigme* 内の *N* を代名詞化した中で 1, 2 人称接辞代名詞を選べば次のようになるだろう。On nous confie à ces gens → *On [nous]<leur> confie → On [nous] confie <à eux> → *On nous <y> confie, <à eux>. 伝達動詞では, *dire* 等を考えると, 直接目的に「人格」の名詞を許容する動詞は難しそうだが, 上記の動詞では多くが許容可であるように思える。ただ, 「*y-V*, -*à eux*」の段階での許容可能性に問題があり, 母語話者間で異なってくるだろう。

On- [nous]_{OD} -[ajouter /annoncer /arracher /cacher /citer/commenter/décrire/défendre /demander /disputer /donner /envoyer /expliquer /imposer /indiquer /jeter /manifester /montrer /nier /offrir / pardonner / passer / promettre / proposer / raconter / rappeler /recommander /refuser /représenter /sortir /soumettre /suggérer /etc.] -à ces gens.

例えば, On nous ajoute à ce groupe de gens → *On [nous]<leur> ajoute → On nous *y* ajoute, *à eux* (*y=à eux=à ce groupe de gens*) は可である。

Y の許容性は限界的な *Ne m'annonce pas cela, comme si tu l'y annonçais, au mur ?* のようなものでは常に可能であろう。

6.1.3. Table 14 : *N₀-V-à ce queV₂-PrépN* : 1/17 verbes

Servir.

Servir のみが *lui/*y* とされている。Table 14 の *servir* の例としては *Cette histoire a servi pour Max à ce qu'il soit élu* が出ている。つまり, この *à ce queV₂* を *paradigme* 内の *àN₂* にした *N₀-V-àN₂-PrépN* で可能な例に関しては *lui/*y* ということであるが, *Cette histoire a servi pour Max à sa réussite* → *Cette histoire a servi pour Max à ses amis* はどうだろうか。ここから逆に *y* が *lui* の代わりになりうることも分かる。

6.1.4. Table 15 : *N₀-V-de ce queV-àN₂* : 11/13 verbes

Causer, demander pardon, être reconnaissant, faire honte, faire part, parler, savoir gré, ne souffler Nég mot, tenir rigueur, venir, en vouloir.

これは *Nous causons à Luc-de ce queV* のようになるから, 基本的に 2 項動詞と同じ扱いになる。*On nous *y* fait *causer*, *à lui*, -*de ce queV* が不可であっても限界的な例(*On pourrait parler au mur* 等)では *y* は *lui* の代わりになりうる。他の動詞・動詞

表現についても同じである。

6. 2. BOONS *et al.* (1976).

6.2.1. Table 33 : N₀-V-àN₂ (N₁ ≠ *queV*) : 7/36 verbes

Aller, aller, appartenir, en imposer, mentir, obéir, sourire.

二つの aller は *Cette clé va à cette serrure* と *Cette robe va à Ida* で基本的に同一動詞である。2 項動詞なので上の 6.1.1. と同じと見なせる。À quel pied va cette chaussure?– Elle y va bien, à ce pied. Cette robe lui va bien 等は可能である。これらからしても <lui/y>-aller は可である。Mentir, obéir は 6.1.1. で見たものと同じである。6.1.1. では à ce *queV* を取りうる動詞クラスの観点から、ここでは *queV* を取らない動詞クラスの観点から、同じ動詞の構文可能性を検討している。Y が lui に代わりうることは同じである。

6.2.2. Table 35L : N₀-V-LocN₂ : 2/7 verbes

Naître, se présenter.

上の位格構文を代表とする動詞で前置詞が à で lui/*y とされるのは上の 2 動詞のみである。これらも 2 項と見なして同様に扱ってみよう。Se présenter : Nous nous présentons à Luc → *Nous [nous]<lui> présentons となる。Nous [nous]<y> présentons, au département は可, Nous [nous] présentons <à lui/à eux> は可だが *Nous [nous]<y> présentons, <à lui/à eux> は不可となる。再帰代名詞が OD の場合, y は à lui (←lui) の代わりにはなり難いということになろうか (cf. Un tel mensonge ne se dit pas <à ces gens/à eux>, *Un tel mensonge ne s'y dit pas, à eux. Postal (1990), 167-168)。ÀN_{pers.2} は *[se]<lui> が不可なので lui になりえなくて, se-V-à lui になるが, この à lui が y にはならない。そもそも Table 36DT では動詞 présenter 自体が lui/*y として提示されている。代名動詞については使役が介入すると lui/*y の問題はより錯綜化しうる。しかし, 限界的な Ridicule de s'y présenter, à ce mur durci qu'est Luc は可である。

6. 3. GUILLET & LECLÈRE (1992).

6.3.1. Table 36DT : N_{0.hum}-V-N₁-àN_{2.hum} : 42/198 verbes

Accorder, acquérir, adjoindre, adjuger, administrer, aliéner, allouer, cloquer, communiquer, concéder, confier, conserver, décerner, dédier, délivrer, destiner, devoir, dispenser, disputer, distribuer, emprunter, enfiler, enlever, garantir, garder, infliger, laisser, mettre, octroyer, piquer, prendre, préparer, prêter, procurer, prodiguer, redonner, remettre, rendre, restituer, retirer, transmettre, vouer.

これは典型的な 3 項の与格構文の動詞で与格の prototype となる構文である。その中で特に lui/*y となる場合である。上には典型とも言うべき donner が挙がっていないが, donner は lui/y で与格, 間接目的の両方が可とされている。Acquérir は用例としては Paul

acquiert ce tableau d'un antiquaire とされこの動詞だけ前置詞が de となっている。しかし、上の 4. COURTOIS (pr.) (1997)には Paul a acquis ce tableau au marchand の例がある。

3 項構文なので、例えば、Nous vous destinons à ces femmes → *Nous [vous]<leur> destinons → Nous vous destinons à elles → *Nous [vous]<y> destinons, à elles となる。*[vous]<leur>-V から[vous]-V-<à elles>まで行くが、y が à elles (←leur) に代わり難い。これらの動詞は 6.1.2.の伝達動詞と類似していて、OD に 1, 2 人称を許容し難い動詞が多いかもしれない。[me/te/nous/vous/se]-<y>-V, -<à lui/à eux> による y→lui の置換が検証不可の場合は限界的な例によることになる。

以上の概観では <lui/*y>-V(-N) とされる構文・用法の動詞でも lui の y による置き換えが形式的にはほぼ全ての場合で可能(つまり, lui, y の両方が可)であるように思える。しかし、同じ構文でも個別の動詞により異なる例は多かった(殊に、文脈により lui, leur が à lui, à eux にはなるが、これらが y になりえない場合)。しかし、<*lui/y>-penser のようにどのような人格化の限界的用法によっても lui が不可能な例は他の方向性位格の y については確認しえなかった。これは与格のように接辞代名詞化が N の非関係的記号内容に影響される場合と影響がなくて動詞と一体化している場合との違いである。

ただし、以上は単なる概観であり、特に penser のような <*lui/y>-V(-N) の動詞は Gross-LADL の Tables 内でもまとまった一覧化をしていないし、これらの動詞の概観もされていない。厳格に lui を拒否する penser のような動詞はそれほど多くはないようである。DUNBAR (1981) は分離代名詞形 à lui が必須の 35 動詞・動詞表現¹³を提示している。Blanche-Benveniste によるとこれら à lui も全て y に代わりうることになりそうである。Lui の y による置き換えの細部については今後の調査に俟つことになろう。

7. 結論

LECLÈRE (1978) によると、与格と間接目的・方向性位格とは移動がある点でかなり類似している。両者は variantes であるとまで言っている。移動はかなり方向性 direction と呼応している。二人のヒトの間の具体物のやり取りが与格構文の prototype であるとするのが彼の考えである。我々としては、与格の基には更に空間認識・空間移動・方向性があるということであり、二つは variantes ではなくて与格は方向性位格の一部を成すことになる。

BLANCHE-BENVENISTE (1975) の指摘は間接目的・方向性位格の本質の一端を突いている。À lui を持つ全動詞は原則として y を持つ(これには言語レベルが本質的に関係してくるように思える)。逆はない(cf. *On le donne à lui → On le lui donne, 時には On l'y donne)。これは「人格 pers」が「非人格-pers」の一部であり、「全対象 > 有方向性対象 > pers の有方向性対象」という包含関係から出て来る。

¹³ Accourir, accoutumer, aller, appeler, arriver, aspirer, attirer, avoir affaire, avoir recours, comparer, courir, croire, être, faire appel, faire attention, habituer, intéresser, marcher, parvenir, penser, prendre garde, prendre intérêt, prétendre, recourir, réfléchir, renoncer, revenir, rêver, songer, tenir, tirer, toucher, unir, venir, voler.

POSTAL (1990) の分析には間接目的・方向性位格と与格との関係について他にはない指摘が見られる。「*On me lui présente → On me présente à elle」と「*On lui pense → On pense à elle」の類似分布は特に興味深い。これは更に「On me présente à elle → On m'y présente, à elle」と「On pense à elle → On y pense, à elle」の類似へと連なる。この分布こそ間接目的・方向性位格と与格の本質的同質性の一端を示している(ただし、「(le)-y-V, -à lui」の段階の許容性がかなり問題になる点には注目)。

*On me lui présente → On me présente à elle は動詞左の lui の「pers」を弱めている。動詞右の à elle はほぼ àN に等しい。これが On m'y présente, à elle になると y では -pers となる。「, à elle」は同格で補足にすぎない(On me présente à elle の「à elle」は補足ではない)。On m'y présente, à elle と On y pense, à elle での y は極めて近い。違いは présente と pense の構文構成力の違いだけである。つまり、前者の双方向性と後者の一方向性の違いであるが、この文脈では présente は双方向性を発揮しえない。

*[Me]<lui> の場合、つまり、1, 2 人称が対格で出現する場合、与格項は接辞代名詞としては出現しえなくて à lui, àN として動詞右へ行く。3 項動詞の場合、Postal の言う「35D : me-lui-V の lui が me-V-à lui として動詞右への降階 demotion」が起きて、これは m'y-V-, à lui となる。À lui の y 化は Blanche-Benveniste も指摘している。そうすると 3 項動詞の OD-OI/DAT は OD 次第で OI/DAT は全て y が可能になる。(Cf. 使役構文での OI-OI の ?On <nous><leur> fait présenter Léa → *On nous y fait présenter Léa, à eux.)

2 項動詞 (N₀-V-àN₂) の場合、N₀-[lui/*y]-V はありうるのだろうか。On parle à Luc は On y parlerait, au mur になり限界的には y は可能であろう。つまり、いわゆる与格動詞は動詞の項構成力は本来あるが、その構成においては与格項の paradigme の意味要因も本質的に介入してくる。つまり、与格項の paradigme 中で +pers が -pers に置き換わると双方向性が一方向性になる助けとなりえて、lui が y になる可能性が出て来るのではなかろうか。この逆 (-pers → +pers が) は本来の間接目的動詞 (penser 等) では起こりえない。

逆が起こらないのは penser-àN のような本来の間接目的動詞では OI の名詞の意味要因は項構成に関係していないからである。それは動詞の关系的意味に一方向性のみが含まれていて動詞と前置詞 à が一体化している可能性があるからである。これは OD の場合に近い。本来、行為項と述辞は一体化が根本にある。

以上のことを要約すると次のようになる。与格と間接目的・方向性位格は本質的に同じである。これらの機能が強く制約されて出現するのは動詞前の接辞代名詞 lui, y においてであるが、この場合、lui は両立する項等の文脈次第では y になりうるが逆はないこともある。結局、y が全てを含みうることになるだろうが、その中でも特に penser-àN のような場合は動詞と前置詞の一体化(熟語 locution, MARTINET (1979), 164, 250 の連辞素 syntème, MELIS (1996), 66 の編入 incorporation)に近いと言えるのかもしれない。

本研究には Paris Est-Marne la Vallée 大学 IGM 研究所の構文解析プログラム Unitex と研究資料を利用させて頂いた。御援助頂いた E. Laporte 教授に謝意を表明する。用例の種々の疑問にお答えいただいた Gilbert Meyer 氏にも感謝する。

参考文献

BAKER, Mark (1988). *Incorporation, A Theory of Grammatical Function Changing*, Chicago, The

University of Chicago Press.

- BARNES, Betsy (1979). *The Notion of Dative in Linguistic Theory and the Grammar of French*, Ph. D. dissertation, Indiana University.
- BARNES, Betsy K. (1980). « The Notion of ‘Dative’ in Linguistic Theory and the Grammar of French », *Linguisticae Investigationes* IV-2, 245-292.
- BLANCHE-BENVENISTE, Claire (1975). *Recherche en vue d’une théorie de la grammaire française, Essai d’application à la syntaxe des pronoms*, Paris, Librairie Honoré Champion, 1975.
- BLANCHE-BENVENISTE, Claire (1978). « À propos des traits sémantiques utilisés en syntaxe : Critique du trait ‘+/-humain’ », *Cahier de linguistique* 8, 1-15.
- BOONS, Jean-Paul, Alain GUILLET et Christian LECLÈRE (1976). *La Structure des phrases simples en français, Constructions intransitives*, Genève, Droz.
- COMRIE, Bernard (1976). « The syntax of causative constructions: cross language similarities and divergence », SHIBATANI, M (ed.) *Syntax and Semantics 6, The Grammar of Causative Constructions*, New York, Academic Press, 261-312.
- COURTOIS, Blandine (prés.) (1997). *Index du DELAS. v08 et du Lexique-Grammaire des verbes*, Paris, Université Paris 7-CNRS UFR d’informatique LADL; (2011). *Gross-Marne-La Vallée.index-entries.csv*.
- DUBOIS, Jean & Françoise DUBOIS-CHARLIER (1997). *Les Verbes français*, Paris, Larousse.
- DUNBAR, Richard Terry (1981). *The Obligatory Use of the Preposition À plus Disjunctive Pronoun after Certain Verbs in French*, Ph.D. dissertation, University of Illinois at Urbana-Champaign, Urbana, Illinois.
- EYNDE, Karel van den & Piet MERTENS (2010). *Dicovalence*, version 2.0, Leuven, University of Leuven, Belgium.
- GAATONE, David (1984). « Une allergie syntaxique en français, Réflexions sur l’opposition LUI/À LUI », *Revue de linguistique romane* 48, 123-140.
- GOUGENHEIM, Georges (1959). « Y a-t-il des prépositions vides en français », *Le Français moderne* XXVII, 1-25.
- GREVISSE, Maurice & André GOOSSE (2011, 15^e éd.) *Le Bon usage*, Bruxelles, De Boeck, Duculot, 337-338.
- GROSS, Maurice (1974). *Méthodes en syntaxe*, Paris, Hermann.
- GUILLET, Alain & Christian LECLÈRE. (1992). *La Structure des phrases simples en français, Constructions transitives locatives*, Genève, Droz.
- HARRIS, Zellig S. (1982). *A Grammar of English on Mathematical Principles*, New York, John Wiley & Sons.
- 林博司 HAYASHI, Hiroshi (1993). 「‘à + 名詞句’ を受ける y と lui について」, 大橋保夫他 『フランス語とはどういう言語か』, 駿河台出版社, 95-119.
- HERSLUND, Michael (1988). *Le Datif en français*, Louvain-Paris, Éd. Peeters.
- HOPPER, Paul J. & Sandra A. THOMPSON (1980). « Transitivity in grammar and discourse », *Language* 56-2, 251-299.
- HUFFMAN, Alan (1997). *The Categories of Grammar, French lui and le*, Amsterdam, J. Benjamins.

- 池上嘉彦 IKEGAMI, Yoshihiko (1975). 『意味論, 意味構造の分析と記述』, 大修館書店.
- 池上嘉彦 IKEGAMI, Yoshihiko (1987). « ‘Source’ vs. ‘Goal’: a Case of Linguistic Dissymetry », DIRVEN, R. & G. RADEN (eds.) *Concepts of Case*, Tübingen, Gunter Narr Verlag, 122-146.
- KAYNE, Richard (1977). *Syntaxe du français, le cycle transformationnel*, trad. de l’anglais par P. Attal, Paris, Éd. du Seuil.
- LECLÈRE, Christian (1976). « Datifs syntaxiques et datif éthique », CHEVALIER, J.-Cl & M. GROSS (pr.) *Méthodes en grammaire française*, Paris, Klincksieck, 73-96.
- LECLÈRE, Christian (1978). « Sur une classe de verbes datifs », *Langue française* 39, GROSS, M. et C. LECLÈRE (pr.), 66-75.
- MARTINET, André (1979). *Grammaire fonctionnelle du français*, Paris, Crédif-Didier.
- MARTINET, André (1985). *Syntaxe générale*, Paris, Armand Colin.
- MELIS, Ludo (1996). « The Dative in French », VAN BELLE, W. & W. VAN LANGENDONCK (ed.) *The Dative, vol.1, Descriptive Studies*, Amsterdam, J. Benjamins, 39-72.
- NEWMAN, John (1996). *Give, A Cognitive Linguistic Study*, Berlin, Mouton de Gruyter.
- 西村牧夫 NISHIMURA, Makio (1994). 「‘もの’ を受ける間接目的人称代名詞」, 『西南学院大学フランス語フランス文学論集』 第 30 号, 107-147.
- 西村牧夫 NISHIMURA, Makio (1995). 「y vs lui — リトレ氏の誤解 —」, 『西南学院大学フランス語フランス文学論集』 第 32 号, 123-155.
- 西村牧夫 NISHIMURA, Makio (1997). 「間接目的 y vs à lui vs lui」, 東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える, フランス語学の諸問題 II』, 三修社, 112-122.
- 尾形こづえ OGATA, Kozue (2005). 「間接目的 lui と y の対立: 動詞 donner の場合」, 東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を語る, フランス語学の諸問題 III』, 三修社, 60-75.
- PERLMUTTER, David M. & Paul POSTAL (1983) « The Relational Succession Law », PERLMUTTER, D. M (ed.) *Studies in Relational Grammar* 1, Chicago, The University of Chicago Press, 3-29.
- PERLMUTTER, David M. & Paul POSTAL (1983). « Some Proposed Laws of Basic Clause Structure », PERLMUTTER, D. M. (ed.) *Studies in Relational Grammar* 1, Chicago, The University of Chicago Press, 30-80.
- PERLMUTTER, David M. and Paul POSTAL (1984). « The 1-Advancement Exclusiveness Law », PERLMUTTER, D. M. (ed.) *Studies in Relational Grammar* 2, Chicago, The University of Chicago Press, 81-125.
- PINKER, Steven (1989, 2013). *Learnability and Cognition, The Acquisition of Argument Structure*, Cambridge, The MIT Press.
- POSTAL, Paul (1990). « French Indirect Object Demotion », POSTAL, P. M. & B. D. JOSEPH (ed.) *Studies in Relational Grammar* 3, Chicago, The University of Chicago Press, 104-200.
- POTTIER, Bernard (1968). « L’emploi de la preposition a devant l’objet en espagnol », *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 63, 83-95.
- RAPPAPORT HOVAV, Malka & Beth LEVIN (2008). « The English dative alternation: The case for verb sensitivity », *Journal of Linguistics* 44, 129-167.
- ROSEN, Carol G. (1984). « The Interface between Semantic Laws and Initial Grammatical Relations », PERLMUTTER, D. M. & C. G. ROSEN (ed.) *Studies in Relational Grammar* 2, Chicago, The

- University of Chicago Press, 38-77.
- ROUSSEAU, André (éd.) (1998). *La Transitivité*, Lille, Presses Universitaires du Septentrion.
- RUWET, Nicolas (1972). « Comment traiter les irrégularités syntaxiques. — Contraintes sur les transformations ou stratégies perceptives ? », RUWET, N. *Théories syntaxiques et syntaxe du français*, Paris, Éd. du Seuil, 252-286.
- RUWET, Nicolas (1982). « Le datif épistémique en français », RUWET, N. *Grammaire des insultes et autres études*, Paris, Éd. du Seuil, 172-204.
- 坂原茂 SAKAHARA, Shigeru (1997). « Indirect Object in French », 松村一登, 林徹 (編). *The Dative and Related Phenomena*, ひつじ書房, 105-144.
- SAPIR, Edward and Morris SWADESH (1932). « The Expression of the ending-point relation in English, French, and German », MORRIS, A. V. (ed.) *Language Monographs* X, 3-125.
- SEELBACH, Dieter (1990). « À propos d'un à-datif en français », RÉMI-GIRAUD, S. & M. LE GUERN (dir.) *Sur le verbe*, Lyon, Presses Universitaires de Lyon, 133-168.
- 柴谷方良 SHIBATANI, Masayoshi (1977). « Grammatical relations and surface cases », *Language* 53-4, 789-809.
- SPANG-HANSEN, Ebbe (1963). *Les Prépositions incolores du français moderne*, Copenhague, G.E.C. Gads Forlag.
- STAROSTA, Stanley (1988). *The Case for Lexicase*, London and New York, Pinter Publishers.
- TAYALATI, Fayssal & Marleen VAN PETEGHEM (2009). « Pour un traitement unitaire de l'assignation du datif en français », *Linguisticae Investigationes* 32-1, 99-123.
- TESNIÈRE, Lucien (1959, 1969). *Éléments de syntaxe structurale*, Paris, Éd. Klincksieck.
- 敦賀陽一郎 TSURUGA, Yoichiro (1992). « Quelques remarques sur les positions relatives des pronoms atones en français », 『語研資料 14—言語研究 II』東京外国語大学語学研究所, 26-41.
- 敦賀陽一郎 TSURUGA, Yoichiro (2010). « Le locatif, le locatif directionnel unilatéral et le datif en français », NAKAMURA, T., É. LAPORTE, A. DISTER et C. FAIRON (éd.) *Les Tables, la grammaire du français par le menu, Mélanges en hommage à Christian Leclère*, Louvain, UCL Presses Universitaires de Louvain, 363-372.
- VANDELOISE, Claude (1987). « La préposition à et le principe d'anticipation », *Langue française* 76, 77-111.
- 山田博志 YAMADA, Hiroshi (1985). 「間接目的について」, 東京外国語大学グループ 《セメイオン》『フランス語学の諸問題 I』, 三修社, 88-100.